



わたしが飯田製作所に入社して数年たった頃、会社で卓球台を購入しました。それまでモータースポーツしかやったことが無く、スポーツとはほぼ無縁の生活をしていましたが、卓球が面白く感じられ、毎晩就業時間後に同僚たちと打ち合っっていくうち、区の卓球チームに所属して試合に出るようになりました。

指導者に恵まれたこともあって区の試合では入賞したり、私の子供が通う地区のPTA卓球大会

では個人戦で優勝したりしました。その技術が買われ、スポーツではあります。10年くらい前から地区の小学生を対象とした卓球クラブで指導員を務め、別の地区ではPTAの親御さん達や区の練

褒めて伸ばす

飯田 茂

半分もできないのです。これでは指導してきたことが全く無駄になってしまふことに気づきました。そこで、指導方法を

年配者にも共通していて、みんな褒めることによつてそれまでとは比べ物にならない程に上達していききました。

習サークルで年配者たちを指導しています。

「何でもいいから一つでもできたら褒める」という指導方法に変えたところ、本人たちのやる気がガラリと変わりました。

この文章を読まれている方で指導する立場の方も多いかと思えます。厳しくしたところで相手を委縮させるだけです。相手の100%を求めたいなら褒めてください。そうすれば相手はその思いに応えようと自ら120%の力を出せるように頑張るはずですから。

年齢、性別に関係なく指導していて感じたのですが、実際は厳しくし過ぎて相手も委縮してしまふだけで何も身につけません。それどころか怯えてしまふ教えたこと

「先生もつと球を出してください」と休憩時間でも必死になつて覚えようと頑張り、ものすごい勢いで上達し始めました。これは子供だけではなく、PTAの親御さんや、

最後に一言。談流暖流に寄稿する機会を得て、読者の皆さんには3回にわたりお付き合いいただいたことを感謝申し上げます。(飯田製作所常務)